

# あとがき

## AFTERWORD



三年前に『動物化するポストモダン』を出版して以降、いや、そもそもそれ以前に、八年前『ユリイカ』に『エヴァンゲリオン』論を寄稿して以降、僕はつねに「オタク関係の評論は止めて本業に専念してくれ」との声に悩まされ続けてきた。そして、それは必ずしも他人だけの声ではなかった。現代思想や情報社会論関係の執筆を放置して、『AIR』や『未来にキスを』の読解に精力を傾け、新海誠や桃井はるこや佐藤友哉の活動をフォローし、『新現実』や『ファウスト』の創刊に深く関わるなかで、僕自身不安を感じなかつたと言える、それはやはり嘘になる。にもかかわらず、それでも僕はここにになにかがあると信じ続けてきた。

本誌は、その僕の信念、というか希望が結晶化したような評論本である。この本では、世紀末のオタクのリアリティが、美少女ゲームのシステムのひ

な可能性が、萌えとコンテンツビジネスの未来が語られている。しかし決してそれだけではない。むしろ、本誌が問題にしているのは、一九八〇年代の虚構化と一九九〇年代の絶望を通り抜けたあと、それでもこの社会のなかで生きなければならぬ僕たちに、ではいかなる主体の可能性が残されているのかという、切実で実存的な——誤解を招くことを承知で言い換えるならば、きわめて「文学的」な問いである。そのことは、本誌収録の評論と小説を読んでいただければ、ただちにわかるだろう。

四半世紀前、日本の文学は、少女マンガの語りを吸収することで大きな飛躍を遂げた。いま美少女ゲームとライトノベルが交差する場所で起きているのは、その第二の、そしてより複雑化し奇形化した過程である。この国では文学とサブカルチャーの境界で繰り返し「内面」が再発見されており、その観点からすれば、本誌が扱った美少女ゲーム運動もまたその動きのひ

とつだと言うことができる。したがって、美少女ゲームについて考えることは、僕たちの生とアイデンティティについて考えることであり、それはまた日本社会について考えることなのだ。このアンソロジーが、オタクであれ非オタクであれ、その変化に関心を寄せる多くの読者に多少とも知的な刺激を感じさせるものになっているのだとすれば、それに越した喜びはない。

ところで、本誌の企画が『波状言論』の編集部でもちあがったのは、五月も半ばに入ってからのことだった。同人誌という枠組みのなか、それからわずか二ヶ月でここまでの本が作れたのは奇跡に近い。そして、その奇跡を起こしたのは、僕ではなく参加者と編集部員である。

まずは、急な依頼にもかかわらず快くインタビューに時間を割いてくれた原田宇陀児氏とササキバラ・ゴウ氏、依頼枚数をはるかに超えた熱の入った原稿を寄せ、長時間の共同討議に付きあってくれた更科修一郎氏と元長柗木氏、『雲のむこう、約束の場所』の追い込みにもかかわらず素晴らしい装画を寄せてくれた新海誠氏、同じく新作執筆の合間を縫って、変名というリスクまで背負い参加してくれた夜ノ杜零司氏、同人出版の門出を祝うため素敵なキャラクターを提供してくれた西島大介氏に、心から感謝の意を表したい。彼らがこのような無謀な企画に、無理なスケジュールを押しつけてほばボランティアに近い条件で参加してくれたのは、裏返せば、僕の仕事に対する期待の表れなのだと思う。その責任を自覚しつつ、期待を裏切らないように努力したい。

つぎに、インタビューアー、討議参加、原稿執筆、年表制作、さらに注釈制作や夜ノ杜氏との連絡係まで、超人的な働きで編集作業に協力してくれた佐藤心氏に、特別の謝辞を捧げなければならない。佐藤氏——というより、佐藤さんと知り合ったのはもう六年近く前で、それ以降、僕は彼に実にさまざまなことを教えられている。その成果は『動物化するポストモダン』にも『網状言論F改』にも活かされているのだが、彼の名が言及されることはほとんどない。この本を作りあげたことで、その不正も少しは改善されたように思う。今後とも、彼とは同じ文筆家として一緒に仕事をしていきたいものだ。

そして、最後になったが、僕の突然の、ときに不条理な要求に粘り強く付きあひ、月二回の『波状言論』配信と本誌制作を並行して進めるといふ綱渡りを可能にしてくれた編集部員たち、とりわけ、本誌編集の中核を担った前島賢と丹羽洋介への感謝を、あらためて記しておきたいと思う。

『雫』から『アトラク||ナクア』『終ノ空』を経て『鬼哭街』に辿りついた前島と、みさきから栞へ、そしてみちるへと確実に対象を低年齢化させていった鍵ツ子の丹羽は、この二ヶ月のあいだ、趣味の違いを乗り越え実にすばらしいチームワークを発揮してくれた。彼らのかわりに単位をとるわけにはいかないが、六月と七月をすべて編集作業に捧げ、大学も行けなければバイトもできず、結果として夏コミで同人誌を買う経済的余裕すら失ってしまったこの二人の貢献に対しては、将来なんらかのかたちで報わなければバチがあたるだろう。とりあえずいまは、ありがとう、とだけ言っておく。

二〇〇四年七月一九日